

宮崎大学教育文化学部 主催

市民シンポジウム

～子どもの今と未来を考える～

第 1 回

子どものからだと運動

〈講演要旨〉

平成 17 年 2 月 13 日（日）

カリーノ宮崎 8 階 シアタールーム（於）

宮崎大学教育文化学部 企画室

目 次

市民シンポジウムの開催にあたって：岩本 俊孝（教育文化学部長） --- 2

【講演要旨①】 城 治 喜（めぐみ幼稚園 園長） ----- 3

【講演要旨②】 宮 内 孝（田野町立七野小学校 教頭） ----- 8

【講演要旨③】 上村 高広（かみむらスポーツ教室 代表） ----- 13

【講演要旨④】 三輪 佳見（教育文化学部 教授） ----- 16

まとめにかえて：鈴木 理（教育文化学部 助教授） ----- 20



国立大学法人 宮崎大学



宮崎大学教育文化学部

市民シンポジウム
子どもの今と未来を考える

このたび、「子どもの今と未来」への意識高揚を企図して、「子どものからだと運動」のテーマのもと、様々な分野で子どもと向き合い、彼らの健やかな成長のために日々尽力されている方々をお招きし、第1回セッションを開催する運びとなりました。

近ごろ、子どもを取り巻く環境の著しい変化により、様々な社会問題が発生しています。このような問題を解決していくためには、地域の関係者・市民が一体となって有効な方策を探究することが大切であり、

「教育」と「文化」を冠する本学部には、そのイニシアティブを担うことが求められています。そうした取り組みの出発点として、地域に根ざした教育・研究の推進を図ることを目的に、本シンポジウムが企画されました。

第1回 子どものからだと運動

後援：宮崎県教育委員会，宮崎市教育委員会

市民シンポジウムの開催にあたって

岩本 俊孝（宮崎大学教育文化学部長）

子育ては古くて、大変新しい問題です。人類の永遠の課題と言ってよいかもしれません。とりわけ子どもが健やかに育つことが難しいこの時代にあって、問題は深刻です。人類にとって、ハイテクかつバーチャルな時代には、これまでとは違った次元の子育て論の構築が必要であるという認識が必要なのかも知れません。

他方、大学は高等教育機関であることは誰しも認めるところです。しかし、その教育・研究が社会とかけ離れた所で行われている場合には、その公共性・存在意義が問題となります。とりわけ、法人化したとは言え、大半の運営費用を国からの補助金に頼っている国立大学法人では、その活動に「社会」の観点を持つことが強く求められています。

宮崎大学教育文化学部は、「社会」に対して教育と文化の側面から貢献することを目的として設置された学部です。本学部の教育と研究をより時代に即応したものとして再構築して行くためには、ひろく社会にその問題点を尋ね、市民の方と意見を交わしていく過程が必要だと思われまます。

そのような趣旨の下、教育文化学部としては、混迷を続ける「子育て」論の再構築に向けて市民シンポジウムを企画することになりました。子育てに関わる分野は無限にあります。したがって、1回きりのシンポジウムではなく、より広い視点からの議論ができるように、シリーズものとして多彩なテーマを設定して、定期的を開催することにしました。その第1回目が、本報告書に掲載されています「子どものからだと運動」というテーマで、平成17年2月13日（日）に、宮崎市内ガガエイトにて開催されたシンポジウムです。

このシンポジウム開催に当たりまして、学外の諸先生方にシンポジストとしてご参加いただき、先進的な取り組みのご紹介やお考えのご発表をいただきました。ご講演いただいたシンポジストの先生方や学外の参加者の方々に対しまして、深くお礼申し上げます。また、ここに、本シンポジウムの内容や今後の議論すべきテーマについてのご意見を伺いたいと考え、ご発表の内容を要約した報告書を作成して、学内外の関係する方々に配布することにいたしました。ご一読いただければ幸いです。

最後になりましたが、本シンポジウムは本学部の企画室を中心に開催しております。企画室の教員の方、またシンポジウムに参加いただいた教員や学生の方にお礼申し上げます。

次回のシンポジウムは5月頃に計画をしています。また、多くの方がご参集くださるようお願い申し上げます。

【講演要旨①】

城 治 喜（田野町 めぐみ幼稚園 園長）

● めぐみ幼稚園の教育目標

「健やかでたくましい体をつくりかしこく心やさしい豊かな感性をもつ子どもに育つように」をめざして日々保育をしております。人間形成の基礎となる乳幼児期に何を大切に子どもを育てたらよいのでしょうか。今の社会を見るとあまりにもさまざまな物(食品を含めて)の氾濫で、子どもにとって何がよいのか選択に困るのではないかと思います。当園では食生活をはじめ衣類、生活の仕方、身体のこと、テレビやビデオの問題、早期英才教育の問題などを見直して、子どもがより良い生活が出来て、豊かな発達が保障できるよう、父母のみなさんと共に学び合いながら保育、子育てを進め実践しております。

● 今、子どもたちが、すくすくと育ちにくくなっています

- ・ 車社会で外で遊ぶのは命がけとなり、室内で過ごすことが多く、歩くことは非常に少なくなりました。
- ・ 遊ぶ友達も少なく、友達がいても一緒にテレビを見るなどして何となく過ごすことが多くなりました。
- ・ 子どもの体位は向上しても体力は年々低下し、不活発になり、低体温など問題になっています。
- ・ 住宅事情では、シックハウスの問題や、近所迷惑を考えて、飛び跳ねる事が出来ない傾向にあります。
- ・ コンクリート、アスファルトジャングルの中で、土や水に親しむ経験が絶対的に少なくなっています。
- ・ テレビの影響もあって生活が変則になったり、夜型になってきて、生理生活リズムを正しく獲得しにくくなりました。
- ・ 冷暖房器具の普及で、暑い、寒いの四季の変化に感じられなくなっています。
- ・ 添加物でいっぱい加工食品、食卓の単品化、肉食化、過砂糖化
- ・ 子どもの運動面では手足の力が弱く、転びやすく、疲れたを連発し、すぐ座り込みたがる傾向にあります。
- ・ 新聞、マスコミから早期教育で焦燥感をあおられ、また遊ぶ環境がないので、せめて習い事でもと拍車がかかります。
- ・ 塾通いが当たり前となり、じつと言うことをきいてと、難しい勉強に追い立てられ、思いっきり遊んだ経験をもたず、心はゆれうごいています。

→幼児期だからこそ、`育ち`を見つめましょう

● 保育の特色

水・砂・泥

子どもは水遊びが大好きです。母親の羊水の中で10ヶ月の間全身で水を感じてきた子どもは、年齢が低いほど水を求めます。水があってこそ生物が成長していくように、当園

でも水遊びを大切に考えています。小さい時にこの水刺激を皮膚からたっぷり受けた子どもは、生きる力を支配している自律神経がたくましく育つといわれています。水の時代・砂の時代・泥の時代といわれるように年齢が高くなるにつれて、次第に泥をこねて物を作って遊ぶようになります。このことは進化の中で人間が土に水を引いて作物を作り、土をこねて器をつくった歴史を子どもたちがたどっているのです。砂も土も水を加え自分で創造したり変化させたりできる教材です。当園では水・砂・泥遊びが思う存分できるように保障しています。

戸外・園外保育

天気の良い日は戸外で遊ぶことを大切にしています。外気に触れ、太陽・緑に包まれ全身を使って遊ばせています。園庭で遊ぶ他にも近隣へ散歩に行きますが、安全を確保するため途中までスクールバスも使っています。本来「人間は自然の中で育つ」ものです。自然の中での活動や動植物とのかかわりを保障するためスクールバスやその他の交通機関を利用し自然を求めて、園外保育を多く取り込んでいます。園外保育は年齢やその年々の子どもの状態を考慮し計画しています。

● 保育の三本の柱

① リズム遊び

脳中枢の発達には6歳までに大人の約90パーセントに達するといわれています。そのため感覚神経と各運動神経を充分動かし、身体の隅々まで使いきる生活が乳幼児期にはとても重要です。幼稚園ではこのような生活を保障するために、遊びとともにリズム運動を重視して行っています。子どもたちの身体が環境などの悪化によりひ弱になってきているといわれていますがこの運動は子どもの発達は人類の進化と同じ道をたどる(個体発生は系統発生を繰り返す)という考えをもとに、斎藤公子先生が研究・発展させたりズム運動です。斎藤先生に学び当園では日常的にリズム運動を行っています。寝返り、ずり這い、四つ足ハイして二足歩行になり、駆けたり飛んだりできるようになる発達を親しみのある動物などになって楽しみながら動きます。この自ら動こうとする力が発達を促し、弱さのある子どもリズム運動を続けるなかで弱さを克服していけると捉えているのです。リズムは足の親指の蹴りを使うよう素足で行いますが、園内は弾力性に富んだ檜の床(地下張りではなく高床)のため、幼児のやわらかい身体にも負担をかけずに思う存分リズム運動ができます。

② 食について

当園では保育の一環として「食欲は生きる力」と捉え食べることを大切にしています。じょうぶな子どもをつくる基本食はごはんを主食とする和食と考えています。一年を通して季節を感じられる食材を使い、和食中心で野菜を多く取り入れ、素材の持ち味を生かし味覚を育ておいしく食べられるよう心掛けています。主食は新米の都城米、えびのの合鴨米の五分づきを使用し完全給食を実施しています。食べ物だけでなく食器も白磁で安全性が高く適度に重みがあるものや無垢の木材を使用した食器や汁椀を使用しています。また、おやつは第四の食事と捉え手作りおやつに力を入れています。お泊り合宿ではまるごと炭火で魚を焼いて食べたり、秋には園外に出かけ紅葉を見ながら全員で食事をしたりしてい

ます。飲み物も砂糖の過剰摂取を避けるためカロリーのない水、麦茶、番茶を飲ませていきます。この様な食生活を重ねるなかで卒園期には何でもおいしく食べられるようになっていきます。また、食生活は性格づくりにもなっているようです。

食文化を身につけ、大人になっても生きる力として食べることを大切にできる人間に育ててほしいと考えて実践しています。

③ 文化について

乳幼児期は体づくりが基本で食べる・寝る・遊ぶを中心に生活していますが、その中で食文化や遊びの文化など子どもたちに伝えたい文化はたくさんあります。五感(触覚・味覚・視覚・聴覚・視覚・嗅覚)が育ち快・不快の気持ちが発達する乳幼児期は石油製品ではなく木製の玩具・質のよいものに触れさせるのも文化と捉えています。演奏家や演劇家を招いたり劇団の観劇もしています。年長の後半になると園長や担任は人間の生き方を伝えたいという願いを持って優れた文学作品の語りきかせをしたり、園外保育や合宿を通して心も身体もたくましい人間に育つよう実践しています。私たちは人間のいのちを守ることを文化と受けとめ、子どもが人と寄り添い合って自立して生きていく力を育てることが、人間の土台をつくる乳幼児期には大切なことだと考えています。昨今の子どもの発達を無視した早期英才教育に踊らされることなく、文字を書くことや算数は学校に入学してから覚えること、一度しかない大切な乳幼児期には「自分で経験する」ことを充分保障することこそ幼稚園の役割だと考えています。また、乳幼児期の心(脳)の状態を絵を見ることによってその時その子どものころ(脳)に何がどのように映っているのか(認識度)またそのときその子どもは幸福であったか不幸であったか等を知るてがかりとして子どもの発達を絵を通して学び続けています。

● 年令別保育課題

① 満3才児クラス(ひよこ組)

手の働きがよくなり、言葉で伝えようとするができるようになる。

- お箸を使って食事ができるように。
- まんべんなく、何でも食べられるように。
- よく遊んで、よく話して、よく眠れるように。
- 洋服を自分で着たり、脱いだりできるように。
- 排便、排尿が自立できるように。
- 砂、泥、水遊びが友達と一緒に楽しくやれるように。
- 友達と役割を決めて遊べるように。
- 折り紙や、粘土・はさみなどを使っての遊びを増やしていく。
- 水遊びに慣れさせていく。(シャワーを頭からかけても嫌がらないように。)
- 読み聞かせや歌を楽しむように。

② 3才児クラス(うさぎ組)

子どもの自己主張が強くなる時期です。大人の毅然とした態度の中で戸外で十分活動させます。

- 何でも食べられる子に。
- 身辺自立がほとんどできるように。
- 自分たちで考えて、友達とごっこ遊びができるように。
- 教諭のお手伝いができるように。
- 散歩に出かけ視野が広がるように。
- 基本のリズム（スキップ）ができるように。
- 読み聞かせを十分楽しむように。
- 箸を使って食事ができるように。

③ 4才児クラス（りす組）

話し言葉がほぼ完成し、ルールのある集団遊びができるようになる時期です。

- 跳ぶ・走る・投げる・引く・押す・ぶらさがるなどの全身運動を高める。
- 切ること・折ること・作ることの作業を増やす。
- スキップを完成させる。
- 水に浮くこと、面かぶりで泳ぐことができるように。
- 友達を助けたり、話し合って遊べるように。
- 長い紙芝居・お話をよく聴けるように。
- 正しいメロディーがとれ、歌が大好きになるように。

④ 年長児クラス（ぞう組）

全身を使った運動がしなやかに、細やかに、力強くでき、感情も豊かに育つ。

- 二拍子、三拍子、四拍子のリズムをからだでとれるように。
- 跳び箱が跳べるように。（開脚跳び）
- 鉄棒の逆上がりができるようになる。
- 登り棒が登れる。
- 縄跳びができる。
- こまが回せる。
- 側転ができる。
- 竹踊りができる。
- 泳ぐことができる。
- 就学前段階の身辺自立をさせる
- 手仕事をたくさんさせ、器用な手の土台を育てる。
- 雑巾縫い、布巾縫い、袋縫い、粘土、人形づくり、折り紙など。
- 語り聞かせ、読み聞かせを楽しく聴ける子どもに。
- 自分の課題にひるまず・臆せず・投げ出さず取り組む子どもに。
- 困ったときは大人にはっきり言えるような子どもに。
- 友達とともに教えあい、助け合いながら課題を克服していく子どもに。
- 歌の意味をわかりあいながら、楽しく歌える子どもに。

（以下、保育内容・園児の生活を紹介する写真）



【講演要旨②】

宮内 孝（田野町立七野小学校 教頭）

七野小学校の宮内孝と申します。小学校に勤めて22年となります。体育を学級経営の中核において実践して参りました。学校教育以外の運動との関わりについては、剣道少年団の指導、現在は週1回陸上のコーチをしています。

私は、学校教育の立場から見た子どもたちのからだと運動の実態と今後の取組についてお話しさせていただきます。

まず、七野小学校の紹介をさせていただきます。七野小学校は、現在児童数84名、PTA戸数は54戸の小規模校です。学校行事、そうじや集会、そして昼休みなど、学校生活の中で異学年で活動することが多く、学年を越えた関わり合いが多いのが本校の特色の一つです。もうひとつの特色として、地域との連携を密にした教育活動が行われていることです。本町の伝統芸能である雨太鼓（写真①）を地域の保存会の方に教えていただいています。公民館対抗のつなひき（写真②）を運動会のプログラムに設定しています。また、消防団にも協力を依頼して、操法（写真③）を子どもたちの前でしてもらいました。子ども達は、真剣な目で見えていました。さらに、本校では、田野小学校校区の子どもが七野小学校に転学・入学することを認める「小規模特認校制度」を実施しています。現在7名の児童が通っています（写真④）。

それでは、子どものからだと運動にかかわる子どもたちの実態についてお話をします。なお、ここで取り上げる新聞記事は宮崎日日新聞に掲載されたものです。

子どもの学力の低下とともに体力の低下が大きな問題となっています。スポーツテストが開始されてから合計得点が上昇し、1970年代後半にかけては横ばい、そしてその後は調査開始当初とほぼ同じ水準まで下降という推移をたどっています。ですから、およそ40年前の子どもたちとほぼ同じ水準をкаろうじて保っていることとなります。このことは、週3回の体育授業や体力づくりの成果ではないかと考えています。しかしながら、週3時間から2.5時間に体育学習の時間が減少している現在において、体力がさらに低下することが予測されます。

また、記事でも述べているように、なんでもないとこで転んで怪我をするなど、怪我が昔に比べて増えました。また、弱音をはく子どもが多く、すぐできません、無理ですという子どもが増えました。えんぴつにぎり、字を書くときの姿勢の悪さも目立ってきています（写真⑤～⑦）。

子どもたちの遊びも変わっています。漫画ドラえもののび太、ジャイアン、スネ夫たちが、空き地で繰り広げる集団での様々な遊びは、見られなくなり、テレビゲーム、カード遊びが主流になってきました。これは、都市部、農村部に限らずです。

なぜ子どもたちが外で遊ばないか、その原因の一端が、総理府の調査から窺えます。総理府の調査によると、子どもたちが外遊びをしない原因は、

- 1 テレビを見る時間が長い

- 2 勉強や塾に忙しい
- 3 遊ぶ場所がない
- 4 歩く機会が少ない
- 5 親が過保護である
- 6 仲間が少ない
- 7 遊ぶ方法を知らない
- 8 車が多く危険である

また最近では、声かけ事案、誘拐など子どもを対象とした悲惨な事件が続き、車ばかりでなく、人か危険のため親が外遊びを控えさせる傾向もあります。

一方では、スポーツ少年団等で運動に積極的に取り組む子どもいますが、やりすぎによるスポーツ障害、疲労を残して登校し朝からあくびの子ども、過度の勝利優先による人間関係のトラブルや運動ぎらいが生じていることもあるようです。

友達とのかかわり方にも問題が生じています。「一緒に遊ぼうと言えず、肩をひっぱってトラブルになった。」「気持ちが高ぶり友達をかみついた」「言い合いに負け、学校からエスケープした」といった、人付き合いが苦手な子どもたちが増えました。学校で人とのコミュニケーションのとり方を学ばせる学習を行う学校が増えています。本県を含む小学校456年生3300名の12%の子どもが、よく眠れない、すごく退屈などうつ病に進行する可能性のある抑うつ傾向が見られたそうです。

また、文部科学省によると、各学級の6%の子どもが、LD、ADHDなどの発達障害をもつと推測されるようです。ですから、運動能力の劣る子どもは、運動経験が不足しているのか、LDなどの発達障害から起因しているのか、問題行動を起こす子どもは、しつけの問題なのか、発達障害から起因しているのかなど、多面的に観察・理解して、その子どもに応じた指導をすることが重要になっています。

このような子どもたちをとりまく様々な問題を解消するひとつの手立てとして、ここでは「体育の授業」と「自由遊び」を取り上げたいと思います。

● 体育授業

体育の授業は、ねらいにそった教師による意図的計画的な営みです。まさしく、教師の力量が問われるところです。

漫画ドラえもんの話に「のび太が九州まで走った」という話があります。のび太家では、「ルームマラソン」を購入し、家族で取り組みました。三日たつと、あきっぽいのび太らしく「はりあいがないんだもの。一箇所ですごい足踏みなんで、あきるよう。」と言ってやめてしまいます。そこで、ドラえもんが、道具の上で足踏みをすればするほど、それに応じて周りの景色が変わる「未来のルームマラソン」をポケットから取り出します。のび太は、それに興味をもち、走り出すと、走るにつれて周りの景色が変わり面白くなります。そして、のび太は、遠く大阪や九州に行きたくなりました。九州までどれくらいかかるのとドラえもんに聞くと「君の足なら1年かかる」といわれ、またのび太はやる気を失います。そこで、ドラえもんは、周りの景色が動くのを10倍 100倍にし、あっという間に九州にくようにしました。すると、のび太はがぜんやる気を出して走り出し、九州まで走りま

した。のび太は、「くたくただけど気持ちのいいつかれだ。走ることに自信がもてたよ」と言います。その晩ドラえもん「君のおかげだ、ありがとう、ありがとう」と何度も感謝しながら、ぐっする眠りにつきました。

この話について、「のび太という生き方」の著者富山大学の横山先生は、仕事が思いがけなくスムーズにいったりスポーツで勝利したりするなどの成功体験によって、意外に軽くハードルを越えられる瞬間がある、と述べています。のび太が「くたくただけど気持ちのいいつかれ」を経験して「自信がもてた」ように、達成感や爽快感を体が覚えることによって、苦手意識は克服できると述べられています。得意なこどもだけが活躍する体育学習、失敗するばかりで、課題が達成できないで体育学習、友達にも教師にも認められない体育学習では、けして体育が苦手なこどもたちに達成感や爽快感を体に覚えさせることはできないと思います。教師自身が運動の構造を見る目、運動のコツそして、それをこどもに伝える技術や教材の工夫ができるような力量を高める努力をなお一層しなければならないと思いますし、そのための研修プログラムの開発が必要だと思います。

● 自由遊び

次に自由遊びです。昼休み、放課後の自由遊びは、体育学習と異なって、大人の干渉や管理のない営みです（写真⑧～⑩）。

運動能力テストにソフトボール投げがありますが、その得点の低下は、他の種目と比べて著しく低下しています。こどもたちの投げる様子を見ると、ボールをもつ腕と同じ側の足をだす投げ方をするこどもが多く見られます（写真⑪）。また、腕の振りはなく押し投げの様相を見せます。このような投げ方は、幼児や低学年のこどもに多かったのですが、高学年にも多く見られるようになりました。それは、体育の時間に投げ方の指導が十分に行われていないことにもよりますが、こどもたちの遊びの経験不足も大きな原因となっています。

私のこどものころは、紙飛行機を飛ばす、めんこ（ぱっちんと言っていました）、こま回しなどの遊びをしていました。この遊びを行うときの腕や腰のひねりの動きは、ソフトボール投げのボールを保持して投げる時の、腕の肘を後方に高く引く動作や、それから前方に腕を振ってボールを投げる動きに似ています。ですから、このよう遊びをしてきた子どもは、ボールを投げる動きが身につけやすかったのではないかと思います。今のこどもたちにはこのような遊びの経験が十分にありません。

このように、最近のこどもたちは、遊びを通して身につけてきた動きの量が絶対的に少ないために、体育の時間に出会う新しい運動に対して、恐怖心が先立ってなかなかしなかったり、やっても動を身につけるまでに時間がかかったりしています。

◆ 野球

また、遊びは、動きを身につけやすくするための重要な役目とともに、社会的スキルを学ばせる役目もあります。

本校では、バットの代わりにテニスラケットを用いた野球（写真⑫）が大人気です。昼休みには、1年生から6年生でチームを作って楽しんでいきますし、私も参加することがあります。

先日もこんなことがありました。

高学年のリーダー格のこどもが、一人一人の野球の力量を見極めて、力量の高いこどもを自分のチームに多く選んで、自分のチームが有利になるようにチーム編成をしようとしています。

そんなときは、相手チームから大きな不満が勃発します。「ずるい、そっちは強い」「同じじゃないか」「だって〇〇君がいるじゃないか」「そっちには△△君がいる」とチームわけにこだわるこどももいます。一方では、めんどろな事よりも「もういいよ、やろう」と言うこどももいます。

チーム分けの話し合いが收拾つかないと、最後には「教頭先生をそっちにやるから」とあきらかにチーム力の弱い方に私を編入するという解決案をだすのです。そして、なんとなくみんなが納得しゲームが始まります。

途中私の大活躍で私のチームが有利になると、「そっちのチームは教頭先生がいるから僕たちは、2アウト交代ね」と提案があります。「そんなのずるい」「教頭先生がフライをとるからぼくたちのチームはすぐにアウトになる」とまたもめるのです。「もうやめる」とふてくされるこどももでてきます。6年生のこどもが「途中でルールを変えるのはおかしい」と正論を言います。それでなんとなくさわぎはおさまり、ゲームが再び始まります。

こんなことを繰り返しながら、その日の昼休みは終わるのです。次の日ももめるかという、次の日だけは、チーム分けではもめないのですが、アウトの判定でもめるなど違うもめごとが生じます。

このように、こどもたちはもめごとが起きないように、こどもたちの中からおおよそのみんなが納得するルールが自然に決めていきます。

このようなもめごとは、教師による管理、構造化されていない自由に遊べる休み時間だからこそ生じるトラブルです。

このようなトラブルを解消する経験をたくさんつませることが大切です。教師はそのトラブルの事実を把握することはしても、先取りして解決しないようにしたいものです。もちろん、日常の教育活動において、対人スキルを指導しておくことは言うまでもありません。

もしかしたら、現在のこどもにとって、自由に遊べる場は、唯一、学校の休み時間かもしれませぬ。

大人の干渉や管理のない、一方ではコントロールされた・安全や環境作りに配慮された休み時間の確保をより一層学校で推進する必要を強く感じています。そして、新聞記事のように、社会全体がこどもの遊びの重要性を再認識して、戸外での集団遊びができるような環境づくりにつながっていけばと思っています。

他人の評価に敏感、教室は戦場、という強烈な見出しの記事が掲載された時、「がばいばあちゃん笑顔でいきんしゃい」という本の一節を思い出しました。筆者は漫才師の島田洋七さんです。

島田さんは、家庭の事情で佐賀の祖母の家に預けられていました。学期末に通知表を持って帰り、おこられるのではないかとほらはらしながら通知表を見せるのです。その場面の会話を読ませていただきます。

「1と2ばかりでごめんね」

と小さい声で、そうやってみた。

するとばあちゃんは意外そうに俺の顔を見返して言うのだった。

「何言うとる。大丈夫、大丈夫。足したら5になる。」

「えっ、通知票って、足してもいいの」

驚いて聞いた俺に

「人生は、総合力」

きっぱりと言い切る、ばあちゃんだった。

このおばあちゃんのような目でこどもたちを見守りながら、今後もこどものからだと運動にかかわり、自分を大好きになるこどもたちを育てていきたいと思います。

ありがとうございました。

(以下、写真)

①



②



③



④

(顔写真省略)

⑤



⑥



⑦



⑧



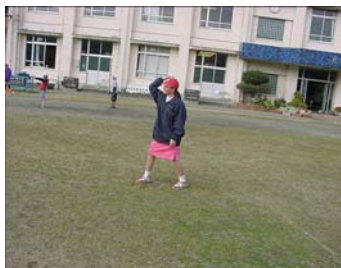
⑨



⑩



⑪



⑫



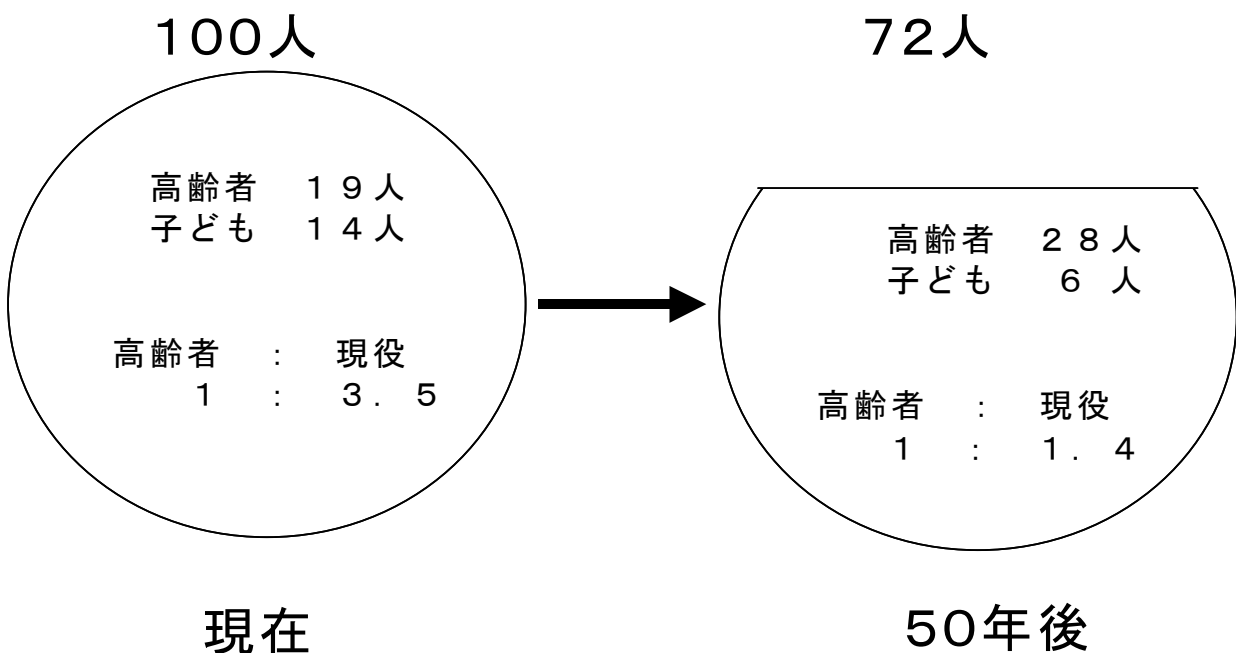
【講演要旨③】

上村 高広（かみむらスポーツ教室 代表）

私は有限会社「かみむらスポーツ教室」の代表をしております。私の会社は600人くらいの子ども達に対して、体育あそびを通して健やかに育てるためのトレーニングを行っております。内容は、たとえば石蹴り、ゴム飛び、エアロビックス、冬になるとスキーもやりますし、泊まりがけのスポーツ合宿を行ったりもしています。楽しく、自分から体を動かせる子ども達になってもらおうというのが、モットーです。

下図は、現在と50年後の将来の日本社会の人口構造を示しています。現在の人口を100とすると50年後には人口は72になります。また、現在は100の中で、高齢者19に対して、子どもは14の割合です。50年後になるとそれが高齢者28、子ども6となります。もっと大変なのは高齢者数：現役世代の比率です。現在はそれが1：3.5ですが、50年後には1：1.4となります。すなわち、現在は高齢者一人を3.5人の働く人で支えているのですが、将来は一人の高齢者を1.4人で支える必要があります。夫婦が残す子どもの数は戦後すぐには4.5人でした。しかし、現在は1.29人となっています。そして100年後には日本の人口は現在の半分以下の5000万人になろうかとしています。すなわち、これからは非常に少ない子が、多くの高齢者を支えるということになります。従って、私の会社のキャッチフレーズは「21世紀を担う元気な子どもを育てること、またタフで忍耐強くやさしい心をもった子を育てること」です。

このような状況の中、どうしたらやさしく、忍耐強い子どもを育てることができるのでしょうか。私は今日、次の8つに気を付けて子どもを育てなければならないという話をしようと思います。



1. 一日30分程度の運動をさせる。
2. 身体をもって教えること
3. スナック菓子などを食べさせない。
4. ジュースを飲ませない。
5. 脂っこいものをなるべく食べさせない。
6. テレビをみる時間をできるだけ少なくする。
7. 携帯を持たせない。
8. 父親のおかずを一品だけ子どもより多くする。

まず、運動のさせ方が大切です。現在少年スポーツチームとして、サッカー、野球など体の同じ部分を酷使するスポーツが盛んです。しかし、これは問題です。同じ部分を酷使すると炎症が起こります、そして慢性的な障害を起こすようになり、成人になってから体が使いものにならなくなります。もっと大きな問題は、心が子どもの間に燃え尽きてしまっ、大きくなってから、楽しんでスポーツをすることができなくなってしまうことです。

そのことを考え、自分の教室では、幼児期には遊びをベースとした楽しい遊びをさせる指導をしています。幼児期にいろいろな動き方を覚え、バランスのとれた体を作らせるように心がければ、すばしっこい子どもが育ちます。そうすれば、小・中・高など大きくなって、すばらしく高い運動能力をもったスポーツ選手が育ちます。

もう一つ大切な指導は、身をもって大人が子どもに、様々なことを教えるということです。中学校・高校では「言教（言葉で教えること）」が可能ですが、幼・小学校期には、「体教（体や態度で教えること）」が大切です。私は、空手の指導もしています。そして子ども達によく突きなどを私に対してやらせます。しかし、小さな子からでも強く突かれたり蹴られたりすると、本当に痛い思いをします。そのような時には私は、わざと同じ体の部分を少し弱めに突き返します。そうすると子どもはそこが本当に痛いところなのだと言うことを、体をもって覚えます。これが体教です。また、幼児期には相手を思いやる心を育てることが大切です。この時期にはそのことを言葉で教えても理解できません。それで、例えば、先生の側に座りたい子がいるのに座る隙間がない。そのような時、たまたま、他の子がその子に席を譲ってやったときには、譲ってやった子を心底ほめてやります。こうすればたった一回で、子ども達は、思いやりとはこのようなことかと理解することができます。

さて、あきらめない心をもつ子どもを育てるにはどうしたらよいでしょうか。11月8日子ども達の間でタヌキチームとタコチームを作り、サッカーの試合をやらせました。私が審判をしていました。一方のチームはもともと強いチームだったのですが、試合終了間際になっても1点負けており、なかなか点がとれませんでした。何度も何度もシュートを打つのですが、点が入りません。その意気込みを見て、私は少し試合時間を延ばすことをしました。そして最後に1シュートが入った途端、ピーと終了の笛を吹きました。わずか20秒延ばしたに過ぎません。その後、私は、粘る心の大切さを、身をもって教えることができたと思っています。

最後に、お父さんに子どもより1品多くのおかずを作るように、お母さんに頼みたいことについて話します。これは飾りでもよいので、お母さんにお父さんを立てて下さいと言いたいのです。子どもたちが大きくなると、お父さんウザイなどと言い始めるのが昨今の

家庭の状況です。大きくなった子どもがお母さんの言うことを聞かないとき、お母さんはよく「お父さんーこと言って下さいよ」とよく頼みます。しかし、お父さんが普段お母さんに虐げられていることがよく分かっている子どもは、お父さんの言うことは絶対に聞きません。飾りでも良いから、お父さんは偉いと思われ、また威厳のある言葉を時々はけるように、お母さんが考えて欲しいと思います。夫婦の仲がよいことを子どもが分かっているならば、子どもは健やかに育ち、大きくなって自分が家庭を持つときも、同じ様な笑顔の絶えない家庭を築きます。是非、このことを考えて欲しいと思います。

まず、子ども達の体を正しく鍛えることが大切ということと、正しい方法で子ども達に接するということが、将来の日本の社会を明るくするのではないかという話をさせていただきました。

【講演要旨④】

三輪 佳見（宮崎大学教育文化学部 教授）

1. 子どもに起こっているおかしなこと

今の子どもは骨が弱く骨折しやすいといわれる。確かに、骨そのものの組織的問題もあるろう。しかし、骨を折るということは、じっと静止して起こることではなく、転ぶなど運動して発生するのであり、そこではどういう動きで転ぶのか、つまり動き方が問題になるのである。



たとえば、走っていて前のめりに転んでも手が出ずに顔を怪我する子どもがいる。あるいは、尻餅をつくときに、床に手をどのように着くべきかわからず、指先が後ろ向きになるように着いて骨折する場合もある。また筆者がマット運動の後転を指導しているときのことであるが、親指が他の四指と反対側に曲がったまま足を着いてしまい、親指の付け根を骨折した事例もあるし、小学校の養護教諭によれば、廊下を歩いていて足が内がえしになり骨折した事例もあるという。転んだり、尻餅をついたりしたときに、どのように手を出せばいいか、また腕だけに頼らずに、全身を使ってどのように衝撃を受け止めればいいのか、それでも支えきれない場合は、たとえば転がるといった動きをどのように加えれば衝撃をやわらげられるかなど、日常の遊びのなかで、頭で考えるのではなく、経験をとおして自ずと身につけていたことである。

2. 人間の運動は学習しなければ身につかない

ここで「経験をとおして自ずと身につく」と書いてしまうように、大きくなればできるようになる、つまり、成長するにつれて自然発生的に運動はできるようになると考えられてきた面があるといえよう。

一般的に、下等な動物よりも高等な動物のほうが、生まれたときの運動能力は高い。たとえば、馬などの高等哺乳類の動物は、生まれてしばらくすると、学習しなくても立って歩けるようになる。それに対して、下等なネズミなどは、生まれたときは目も開いていないし、さらに下等な動物であれば、卵のまま生まれてくるので、誕生時には運動どころか、からだそのものができていないのである。



一方、人間はというと、もっとも高等な動物であるにもかかわらず、人間らしさの象徴とも言える直立二足歩行は、生まれて約1年経たないとできるようにならない。これは、妊娠期間が脳の発達のために使われ、それ以外の機能が育たないまま生まれてきてしまうためである。こうした人間の新生児特有の現象を、ポルトマンは「生理的早産」と呼んでいる（ポルトマン「人間はどこまで動物か」岩波新書）。しかも、単に1年が経過すれば、自然と立って歩けるようになるのではなく、学習しなければできるようにならないのである。このことは狼に育てられた野生児の事例からも明らかである（ゲゼル「狼に育てられた子」家政教育社）。

現代の子どもたちを見ていると、日常生活のなかにたくさんあった運動を学習する機会が失われていると言えるだろう。たとえば生活様式が変わり、座ること、とくに正座をすることは非常に少なくなった。筆者が指導している子どもに、正座ができないという子どもがいた。それも、単に長い時間座ってられないというのではなく、正座の姿勢そのものになれないのである。聞いてみると、足首が硬くまっすぐ伸びないため、正座をしようとしても痛くて足の甲が床に着かないのである。



3. 自然にできるのではなく指導する必要がある

このように自然にできるようになると見えていた運動は、実は学習によって身につけているのである。たとえば、生後4ヶ月ぐらいになると、赤ちゃんは差し出されたガラガラのようなおもちゃに向かって手を伸ばす。そして、からだの中心線、つまり正中線を越えて手を伸ばすようになり、からだにねじれが生じる。さらに、仰向けで寝ている横にあるおもちゃを取りたいが、手が届かないと寝返りを試みる。しかし、まだ寝返りすることはできず、途中で止まってしまうのである。そのようなとき、親は子どもの腰に手を当て軽く押してやることによって寝返りを助けてやる。さらに寝返ろうとする力が強くなってくると、あと一息でできるという状態になる。ここで腰を押して寝返りさせるのは簡単であるが、子どもが自分でできるようになることにはつながらない。そのような場合には、下になっている手で親の指を握らせ、子どもが自分のからだを自力で引き寄せられるような条件をつくることで、寝返りを達成させてやる。

寝返りができハイハイするようになると、子どもは興味あるモノのところに移動し、つかんでは口に持っていき、なめて調べるようになる。親は口に入れては危ない、あるいは困るものを、子どもの手が届かないようにテーブルの上に置いたりする。そのことが、子どもをつかまり立ちに導くのである。親のほうはというと、今度は棚の上などさらに高いところにモノを置く。それに対して、子どもは背伸びしてモノを取ろうと試みる。背伸びするということは、単に立てるようになっただけでなく、自分のからだを床から押し上げる技能が育っていることを意味している。



また、つかまり立ちができるようになった1歳前後の子どもは、親のはたらきかけにより「いない・いない・ばあ」といった遊びもするようになる。襖や壁の陰から顔を横に出し、親が驚く（ふりをする）のが面白くてするのだが、この動きをするためには、片側への体重移動が必要なのである。このように体重を両足に同じようにかけて立っているのではなく、片側に移せるということは、体重のかかっていない足は自由になるのであり、踏み出す、つまり歩き出す準備ができていくということである。背伸びをしてからだを押し出す力を育て、片足に体重移動することによって反対足を踏み出す力がついてくるのである。

こうした日常的な親と子どものやりとりからは、教えている、あるいは学んでいるとい

うことは意識されない。しかし、このような日常生活における運動の機会がなければ、ひとり歩きに必要な能力は育たないのである。

4. 大切な子どもの時期

人間は先天的に運動ができるわけではなく、後天的に学習しなければならないということを確認した上で、さらに子ども、とくに幼児期の運動発達がもつ意味を考えてみたいと思う。「這えば立て、立てば歩めの親心」と言われるように、立って歩けるようになるまでは、親は自分の子どもの運動発達に関して、細心の注意を払っている。それは、泣いたりすることも含めて、子どものことを理解する手立てが、ほとんど運動しかないからであろう。しかし、歩けるようになると、親の関心は運動から言葉の発達に移ってしまう。

ところで、一般的には3歳までに走る・跳ぶ・投げる・捕るという動きが芽生え、小学校入学までには、走って跳ぶや捕って投げるというように運動が組み合わせられるように



なる（マイネル「スポーツ運動学」大修館書店）。つまり、小学校へ入学するまでには、スポーツを親しむための基本となる運動はもう発生しており、この時期に体育・スポーツが得意かどうかということは、およそ決まってしまうのである。子どもの運動発達にとって、これほど大切な時期にもかかわらず、親の関心が運動に向かわず、幼稚園や小学校に入るまでは、運動を教えられることがない「体育」の空白期間になってしまう。

う。

5. 子どもの運動教育に必要なこと

運動する機会が減ってしまった現代の子どもたちに、いかにして多様な運動を経験させ、動いたときのからだの感覚を取り戻すことができるかと考えてみたときに、親が運動指導者として役割を果たせるかが大切になってこよう。もちろん、何歳でどんな動きができるかという運動発達について知っていることは、これからの親には必要な子育ての知識である。

しかし、もっと大切なことは、目の前にいる自分の子どもの動きを共感しながら見て、こんなふうになればもっといい動きになると見抜く力を持つことである。このようなことは、以前は多くの親がしていた。たとえば、子どものキャッチボールの相手をしてやる父親の姿を思い描いてもらいたい。父親は自分の力を最大限に発揮してボールを投げることはしない。そうかといって、簡単に捕れてしまうようなボールばかり投げられると、子どもは飽きてしまう。子どもにとって、父親とキャッチボールする魅力の1つは、友達のようにまったく捕れないようなコントロールされていないボールではなく、自分の手の届くところに確実に来るけれども、いい加減な構えでは捕れない、手ごたえのあるボールを投げってくれるからである。そのときの父親は、子どもの現在の状態を見抜き、こんなふうになれば捕るのがうまくなれると子供のからだを感じ取り、さらにそういう捕り方になるようなボールを投



げるために、自分のからだを動かしているのである。

6. 子どもの運動教育と地域

このように子どもに運動を教えるためには、子どもの動きを感じ、親がそれに合わせて動いてやるが必要になる。しかし、親自身に運動の経験が少なくなっているのも事実である。たとえば、大学の教養の授業でボーリングを取り入れると、ここ数年、右足を出しながら右手で投球する男子学生が出てきている。そのとき学生に自分の動きがどうなっているかわかるか問いかけてみると、動いているときの自分のからだを感じられないという。

そうした状況において、現代の子どものからだと運動をめぐる問題を解決するためには、大学の教養や社会における生涯学習に、親や親になる人たちを運動指導者として育てるプログラムを組むことが1つの方策として考えられる。しかし、子どもは親のもとだけで育つわけではなく、また親だけで育てられるものでもない。そこには地域社会との結びつきが大切であり、専門家の果たす役割が大きい。

筆者は、現在附属小学校と西池小学校の高学年の児童を対象に体操競技教室を開設し、



さまざまなスポーツの基本的な動きも取り入れながら指導している。そこでは、確かにこんなこともできないのかと思うことも多いが、いくらやってもできないというわけではなく、やればできるようになるのである。小学校高学年は運動の最適学習期とも言われ（マイネル「スポーツ運動学」大修館書店）、この時期を逃さずに、多様な動きを経験し、自分のからだに関する新たな感覚をつくっていくことが重要である。



まとめにかえて

鈴木 理（コーディネーター：宮崎大学教育文化学部 助教授）

大学をはじめとする教育機関が「知識・技術の伝達者」であった時代はすでに終焉を迎え、代わって「教育サービスの提供者」の任を多く担うことが、社会的に求められています。これに伴い、「当該サービスの受益者」に対して、「コストに見合うベネフィットを上げていること」を明示する「説明責任」も発生しています。このような時代状況において、とりわけ「教育」と「文化」を冠する本学部に要請されるのは、現在そして将来の社会を担う「市民」と手を携え、いわば「文化の創造を担う市民のサポーター」として優れた機能を発揮することであると考えます。こうした認識に立ち、本学部企画室では、最重要案件として「子どもの今と未来を考える」ことを掲げ、その具現化に向けて思案を重ねてきました。

今回、その皮切りとして、「子どものからだと運動」をテーマとして設定し、様々な分野で子どもと向き合い、彼らの健やかな成長のために日々尽力されている方々をお招きして、第1回セッションの開催を見ることができました。本報告書にご紹介しておりますように、シンポジスト諸氏は、それぞれ独自の観点から「子ども」「からだ」そして「運動」を捉え、特に幼少期にどのような経験を保障することが子どもにとっての「栄養」となるのかを、私たちに熱く語りかけてくださいました。各氏の立場には若干の違いはあれども、かつて子どもを取り巻いていた「自然」はもはや消滅の危機に瀕しており、これを取り戻して子ども本来の「育ち」を保障するために、しかるべき手立てが必要である、との認識には相通じるものがあるように感じられました。この課題は、教育文化学部が担う教育・研究の中核に位置付けられるのは勿論のこと、「子ども＝社会の宝」の育ちを支え見守る私たち市民の重要なテーマでもあります。

もとより本シンポジウムは、何某かの「結論」を導出することを志向しているのではなく、むしろ今後、私たち市民が何をまなざしていけばよいのか、その方向性をライトアップすることを目論むものです。その意味で、第1回セッションは概ね成功裡に展開したといえるのではないのでしょうか。

しかし一方で、こうした試みに不慣れなこともあり、準備作業の遅れから本シンポジウム開催の情宣活動に遅滞を来したこと、そして、私ことコーディネーターの力量不足も相俟って、多くの市民の方々に議論への参入をお取り計らいできなかったことが、たいへん悔やまれます。今後、続くセッションにおきましては、今回の経験を十分に反映させ、いっそうの充実を図って参りますので、是非ともご来場賜り、ご指導・ご鞭撻をいただければ幸甚に存じます。

以上、略儀ながら、本報告書のまとめとさせていただきます。